

2004.11 Vol.4

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



■開館2周年エッセイ

窯業地の現在、 利川、鶯歌、そしてMINO

2年という月日を問われれば、私はためらいなく、なごかったと答えるだろう。2002年10月12日スタートの開館記念展「現代陶芸の100年」(「日本陶芸の展開」「世界の陶芸」)以来、「ロシア・アヴァンギャルドの陶芸」「デザインとアートの挑戦—国際陶磁器展美濃の歩み—」「小山富士夫の眼と技」「表現者河井寛次郎」「ミノ・セラミックス・ナウ 2004」と、図録をともなう展覧会だけでも7展を展開してきた。また、その間に数多くの講演会などの普及事業や、紀要の発行などさまざまなことに取り組んできた。しかし、たとえそれらが、どれも初めての仕事であり、施設との折り合いをつけることや、広報が行き届かないことというような壁があろうとも、美術館・博物館であれば通常のペースでの仕事量であり、特別なことではない。それでは、なぜなごかったと思うのだろう。その答えとして、私は陶芸を取り巻く環境の変化ないし、その兆しをあげたいと思う。

2002年という私たちの美術館の開館の年はまた、「第6回国際陶磁器展美濃」が開催された年でもあった。それまで体育館などで開催してきたこの展覧会が、はれてそれ専門の会場を確保した年でもあるのだ。3年に一回つまりトリエンナーレとして開催されているこの展覧会については、国際的な評価が高いにもかかわらず、国内的にはいまだあまり知られてはいないのという状態にあるのだが、2001年に韓国の利川で、2年に一度のビエンナーレとしてはじめられた国際公募展や、同じくビエンナーレとして今年スタートした台湾の鶯歌における国際公募展によって、美濃展の重要性がクローズアップされた形になった。それは、韓国・台湾の展覧会がともに国家事業として、大規模な形で開催され

ており、賞のあり方や審査の方法など、その開催形式が美濃展をかなりの部分で取り入れているからである。韓国が現代美術等で国際的な展覧会を開催しているのは、ご存知の方も多いと思うが、陶芸もその対象となり、それもその開会式に大統領が出席するという一大イベントとして取り組み、さらにそれを台湾が追いかけるという展開を見せたのは、注目せざるを得ない。来年は美濃展と利川展が相前後して開かれるが、韓国は、グランプリ賞金を一挙に2倍とし、それまで同額であった美濃展に差をつけた。もともと、韓国はグランプリはひとつだが、美濃展は陶芸部門とデザイン部門にそれぞれグランプリはあり、二つ合わせれば同額であるといういいわけもあるのだろうが、おそらく陶芸展としては世界最高という賞金の額(日本円にして約600万円)のインパクトは大きいと言わざるを得ない。しかし、このような外面的な状況だけではなく、変化の兆しはそれらの展覧会に出品されている作品そのものに現れているものに注目すべきだろう。そこには、いわゆるオブジェの退潮とほどよい大きさの器の増加や、磁器における表現の多様化など、注目すべき兆しが現れており、明らかに陶芸全体がひとつの潮目をむかえているのが明白にわかるのである。おそらくこのことは来年の韓国展と美濃展でより明確になるだろう。現代美術が、映像の氾濫とイメージの肥大化を強めているのに対し、そこにある素材と手仕事の实在感で独自の領域を見せつつある工芸、そしてその中核をなす陶芸のここ数年の状況は、月日のながさを感じさせるに十分なものと私には思えるのである。



■次回開催展予告

うつわとウツワのかたらい

2004年12月21日|火|—2005年3月27日|日|

当館のコレクションによる企画展『うつわとウツワのかたらい』展を開催します。これまで、当館では、日本国内はもとより、海外 27 カ国から 610 点の作品を収蔵して参りました。こうした収蔵作品を、一人でも多くの皆様に、楽しく充実感をもって鑑賞していただけるようにと、テーマ設定そのものを考えさせていただきました。本展では、空間を抱え込むくぼみがみられるものを“うつわ(ウツワ)”とし、その多様な“かたち・いろ・つちはだ”に着目してみました。そして、年代や技法・地域など、これまでの焼き物に対するとらえ方を今回、一度離れ、新鮮な切り口から新しい価値を発見しようと思いました。

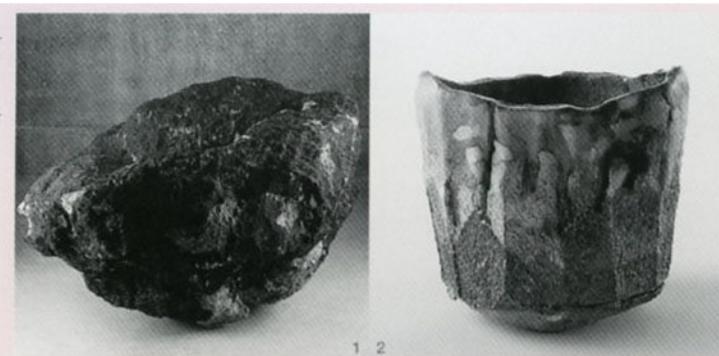
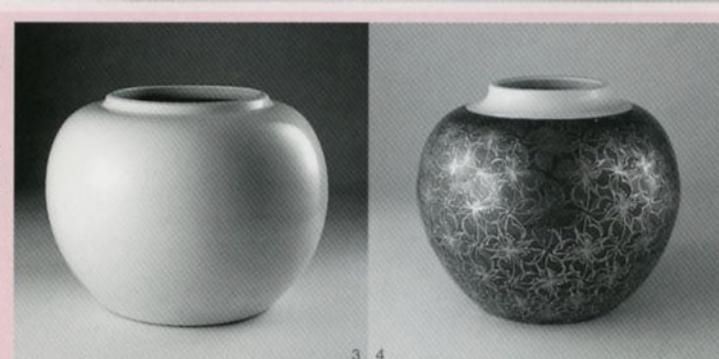
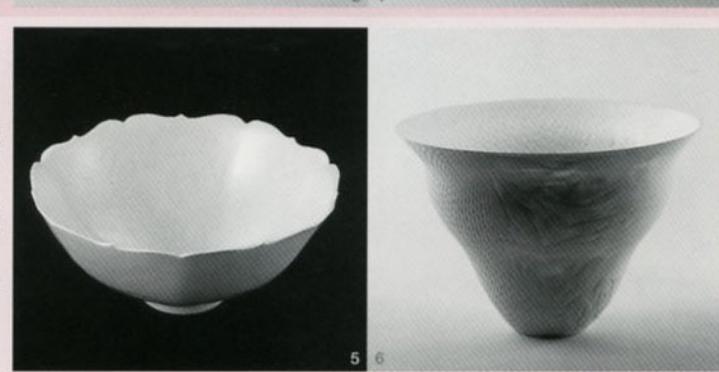
「あつたらしいな…こんな作品と作品のかたらい」これをキーワードとし、ワクワク・ドキドキできるような展示を目指しています。

そこで、作品選定の二つの方向性を定めました。一つ目に、互いの違いが際立つ、「異なる表情」をもち、これまで同時に展示されることがなかった作品同士の出

会いを演出すること。そして、二つ目に、つながる琴線とでも言える、「共通項」をくくりだし、作品同士のかたらいを演出することです。このような、出会いを得た“うつわとウツワ”がひとつところに存在するなかから、新たな価値を観賞者自身の心で発見していただければ幸いです。

〈学芸員 岩井利美〉

会期	2004年12月21日(火)–2005年3月27日(日)
休館日	毎週月曜日(ただし、月曜日が休日の場合はその翌日) 年末年始(12月29日(水)–1月3日(月))
会場	岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
開館時間	午前10時–午後6時(入館は午後5時30分まで)
観覧料	個人 一般320円(260円)、大学生210円(160円)、小中高生無料 ※()内は20名以上の団体料金 ※この料金で、ギャラリーIIにて開催中の他の常設展もご覧いただけます。

<p>異なる表情 大きさ、制作意図ともに全く違う二つです。</p> <p>共通項 しかし、その焼成による荒々しい土はだは、意外なほどの共通点を感じられます。</p> <p>こんな出会い、 かたらいから 展示が始まります</p>		<p>1. クラウディ・カサノバス(スペイン) (トスカ) 1996年 2. 樂吉左衛門 焼貫黒茶碗(層氷織織) 1999年</p>
<p>異なる表情 白一色の肌に対し、金・銀・赤の極彩色の世界が向き合います。</p> <p>共通項 「形は身体骨格であり、模様はその衣服である。…」と言った富本のカタチへのこだわりがみてとれます。</p>		<p>3. 富本憲吉 (白磁大壺) 1941年 4. 富本憲吉 (色絵金銀彩四弁花模様鉢壺) 1960年</p>
<p>異なる表情 美濃と遠く離れた北欧の作品…</p> <p>共通項 鳥や花が彫り込まれた塚本作品の薄い器体は、実に美しい透明感のあるアイボリー色を帯びています。そして、遙かノルウェーの作家、アルネ・オーセの「白い器」は、所によって光が透けて見え、北欧の白い世界を美しく表現しています。ここには、観る者を引き込む、白の世界が広がっています。</p>		<p>5. 塚本快示 (白瓷輪花鉢) 1977–80年頃 6. アルネ・オーセ(ノルウェー) (白い器) 1998年</p>

企画展報告

MINO CERAMICS NOW 2004

ミノ・セラミックス・ナウ 2004

「美濃」から「MINO」へー世界へ発信する伝統と現代の陶芸家たち

2004年9月4日|土| - 12月5日|日|

岐阜県下で活躍、 120名の作家 201作品の競演

岐阜県現代陶芸美術館は2004年10月12日をもって2年目の秋をむかえました。開館記念展として開催した「現代陶芸の100年展」を出発点として、さまざまな展覧会に取り組んできました。“美術館は、自らのよってたつ土地とむきあうことが使命である”という考えのもと「ミノ・セラミックス・ナウ 2004」は、当館が建設された岐阜県東濃地域そして岐阜県の陶芸にむきあうべく開催したものです。

岐阜県南東部東濃地方で焼かれるやさものは“美濃焼”と呼ばれ、この地域は古くは織部、志野、黄瀬戸などの桃山茶陶を中心として花開いた屈指の窯業地です。現在日常雑器の生産地として知られるこの地域の陶芸制作におけるターニングポイントは、昭和5年(1930)年岐阜県可児市久々利大萱で桃山時代の志野陶片が荒川豊蔵により発見されたことといえるでしょう。それまで瀬戸産とされていた黄瀬戸や志野、瀬戸黒、織部などが美濃の地で焼かれていたことが証明され、“美濃焼”が産地ブランドとしての力を得ることになります。また同年、美濃出身者としてはじめて五代加藤幸兵衛が第11回の帝国美術院美術展覧会に初出品、入選し

ています。この2つの出来事は当時の美濃の陶工らに大いに勇気を与え、それまでに芽生えつつあった創作意識を後押しして、のちにこの地域から多くの陶芸家が出現するようになりました。

戦後には、重要無形文化財保持者として第1次認定された荒川豊蔵、岐阜県陶磁器試験場の場長として勤めた五代加藤幸兵衛、クラフト運動を実践した日根野作三、安藤知山、白磁・青白磁の探究者である塚本快示らがこの地域の陶芸発展の先駆者というべき活動をくり広げます。また人材育成を目的とした専門機関である多治見工業高等学校、岐阜県陶磁器試験場(現岐阜県セラミックス技術研究所)、多治見陶磁器意匠研究所では、地元出身者のみならず、他府県から多くの若者達が学び多方面で活躍するようになりました。そして1986年には国際陶磁器フェスティバル美濃が開催され、この地域を日本における重要な窯業地としての認知を世界中にひろめます。

「ミノ・セラミックス・ナウ 2004」では120名の作家による201作品を出品。戦後の活動を中心に、「美濃陶芸の先駆者たち」「美濃焼復興」「古典から造形へ」「オブジェとクラフト」「公募展とニューウェーブ」の5部構成で紹介しています。

美濃陶芸の先駆者たち



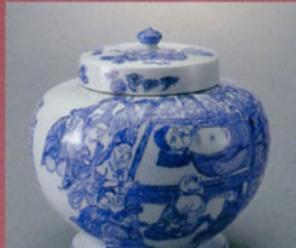
初代安藤知山
〈タタキ釉陶板〉1956年
五代加藤幸兵衛
〈天目釉瓜形花瓶〉1930年

美濃焼復興



各務周海
〈黄瀬戸皿〉2003年
若尾利貞
〈胤志野俎皿〉2003年

古典から造形へ



青山禮三
〈涅槃図徳壺〉2002年
河合竹彦
〈あらまゝー〉2003年

オブジェとクラフト



安藤光一
〈青磁盛皿〉1999年頃
〈青磁酒器〉2003年
松永泰樹
〈彩色ぐい〉
〈白磁注器〉2004年

会 期 2004年9月4日(土)～12月5日(日)
 休館日 毎週月曜日(ただし、月曜日が休日の場合はその翌日)
 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
 開館時間 午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
 主 催 岐阜県現代陶芸美術館

観覧料 一 般 800円(700円)
 大学生 600円(500円)
 小中高生 400円(300円)※()内は20名以上の団体料金

関連企画 セッションI
 9月5日(日)14:00～16:00
 シンポジウム:美濃陶芸の現在「茶陶、造形、クラフト」
 ナビゲーター/高満津子(当館学芸員)
 パネリスト/伊藤慶二、加藤委、加藤陽児、堀俊郎

セッションII
 9月19日(日)14:00～16:00
 シンポジウム:教育・研究の現場から「多治見工業、セラ研、意匠研」
 ナビゲーター/立花昭(多治見市農林商工課)
 パネリスト/伊村俊見、中島晴美、長谷川善一

トークI
 10月3日(日)14:00～15:00
 自作を語る 吉田喜彦

トークII
 10月17日(日)14:00～15:00
 自作を語る 安藤光一

トークIII
 10月31日(日)14:00～15:00
 自作を語る 加藤幸兵衛

場所:すべて岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルーム

文化の日スペシャルI
 11月3日(水・祝)
 13:00～13:50 渡辺泰幸作品による演奏会「土の音を聞く」演奏・永田砂知子
 場所:岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
 14:00～16:00 トークショー
 ゲスト 井上隆生(元朝日新聞編集委員)
 場所:岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルーム

出品作品は、この地域に伝わる様式、技術により美濃陶芸の独自性をかかげ、志野や黄瀬戸などの制作に取り組むもの、美濃地域以外に伝わる古典的な技術と釉薬を駆使して独自の造形性を追求するもの、前衛陶芸と呼ばれるオブジェ制作、生活に密着したクラフト制作を行うもの、そして、国際的な公募展などへチャレンジし、県外でも個展を中心に活動する40歳以下の作家らの活動など、多彩多様な岐阜県の陶芸の現状をご覧いただけます。

展覧会では、作品のみならずクラフト運動の先駆者である日根野作三のスケッチ、安藤知山により設立された小谷陶磁器研究所での試作品、戦後展開されたグループ展などの写真、ポスター、パンフレットなどの資料も多くの方の協力により展示しています。これら資料からは、伝統的な窯業地であるこの東濃地域において、陶芸家らが新しい創作表現を求めて研究会を開催し、試行錯誤を重ねてきたことを知ることができます。

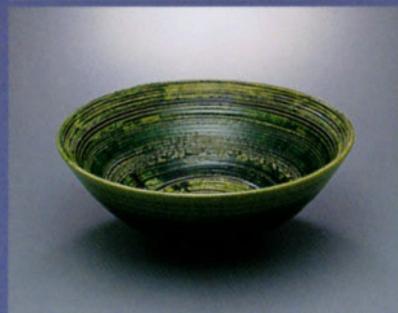
会期中に5つの関連企画と、茶会、演奏会、トークショーを開催しました。11月20日現在で5,094名の方にご来館いただいております。この展覧会を機にこの地域における一層活発な創作活動が展開されることを願っています。

(学芸員 高満津子)

公募展とニューウェーブ



所貞治
 〈陶彩の海〉1985年



安齊久嗣
 〈風の記憶〉2002年
 鈴木徹
 〈緑釉鉢〉2004年



水野幸一
 〈黒土漆ひずみ鉢〉2004年
 林茂樹
 〈Heart break night—沈黙する境界—〉2003年



伊藤秀人
 〈志野りんご〉2004年
 中島由加利
 〈M氏/K氏〉2004年

■教育普及活動

土で作る心のカタチ2004

今年度、収蔵作家を招いて観賞会と作品制作を行うワークショップを3回行いました。

3回のワークショップは、思春期の生徒達が、個性的な作家との出会いの中で思いを交わし合い、鑑賞から制作へとつながった活動をするものです。

第1回目の「板橋廣美教室」では、「カタチの境界」をテーマにして、風船の中に石膏を入れて造形体験をしました。

なかでも、カタチづくりを全身でつかむために、気象観測用の大きな風船に抱きついたり、もたれかかったりする刺激的な体験をしました。

次に、第2回目となる「川口淳教室」では、

作品の前で実に興味深い体験談や制作の秘密を聞いたり、時に自分の進路についての相談をしたりと、つっこんだ心の交流をすることができました。

第3回目の「田嶋悦子教室」は、ガラスと陶を組み合わせる、革新的なその制作方法や考えについて、展示室でわかりやすく語ってもらいました。そして、野菜や果物をモチーフとして、田嶋さんに後押しされるように、思い切った制作をすることができました。

こうした中から誕生した中学生・高校生の作品とワークショップの様子は「思春期のカタチ」展(1月19日より3月4日まで)としてご紹介いたします。

〈学芸員 岩井利美〉



日 時：7月24日(土)・25日(日)
講 師：板橋廣美
テーマ：カタチの境界 巨大な風船をつかかって体感的にカタチをつかむ



風船(小)の中に石膏を流し込み、空間との境界に着目してカタチをつくる



日 時：8月28日(土)・29日(日)
講 師：川口淳
テーマ：土でつくる記憶のカタチ、心のカタチ



心の風景としての土台を粘土の板でつくる
原風景をいろどる、記憶の中にある出来事として様々なパーツを粘土でつくり、土台に接合して作品とする。



日 時：11月6日(土)・7日(日)
講 師：田嶋悦子
テーマ：カタチの広がり～自然の中から自分の好きなカタチを見つけ出す～



モチーフ(野菜)から自分の好きなカタチをみつける



展覧会スケジュール

	2004.11	2005.1	3	5	6	8
ギャラリー I	ミノ・セラミックス・ナウ2004 9月4日—12月5日	うつわとウツワのかたらい 12月21日—3月27日		華麗なるマイセン磁器 —シノフズリー、ロココからアール・ヌーヴォーまで— 4月9日—6月5日		没後100年記念 フランスの至宝 —エミール・ガレー 6月18日—8月31日
ギャラリー II	イタリアの現代陶芸 10月5日—3月4日			ヨーロッパの名窯—王侯・貴族の愛したうつわ— 3月19日—10月16日		
	世界のモダンデザイン—白いうつわにみるかたち— 10月13日—3月4日					
	気になるカタチ—日本陶芸の新動向— 10月19日—1月16日	思春期のカタチ 1月19日—3月4日				

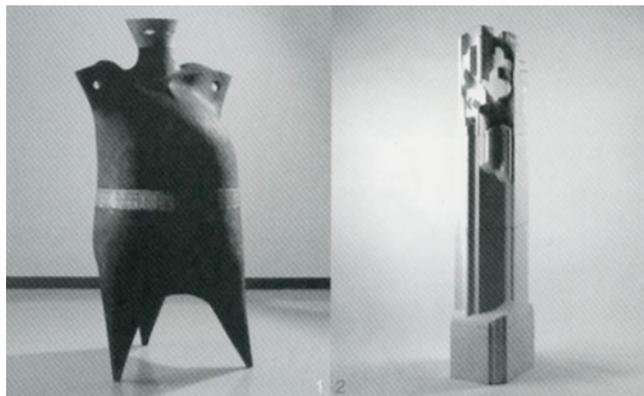
ギャラリー II 常設展示案内

展示室 A

イタリアの現代陶芸

2004年10月5日(火)–2005年3月4日(金)

マヨリカ陶器の伝統で知られるイタリア現代陶芸は、イタリア独自の伝統をふまえて、古典と現代との融合する形態など独自の陶芸文化によって、世界の現代陶芸における主要な動向の一つと見なされてきました。今回はそのようなイタリア現代陶芸の現況をご紹介します。



展示室 B

世界のモダンデザイン

—白いうつわにみるかたち—

2004年10月13日(水)–2005年3月4日(金)

ものを製作するうえで、模様とともに、かたちをデザインすることも必要条件のひとつです。形態デザインの美しさを見るには、視覚が色や図柄に左右されないことから、白色であることが望ましいとされています。今回はそのような「やきものと白」の関係の一側面である陶磁器デザインとかたちをご覧いただくために、白い形のうつわをご紹介します。



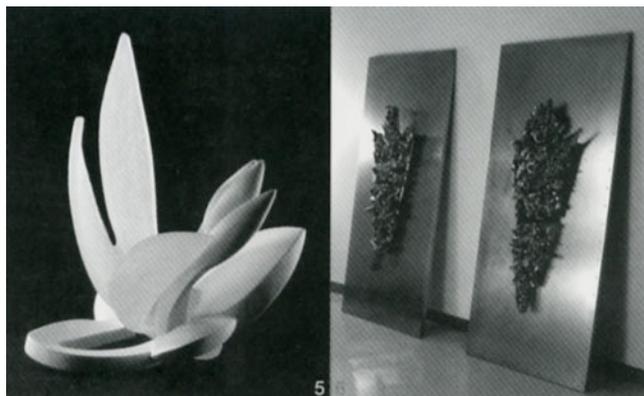
展示室 C

気になるカタチ

—日本陶芸の新動向—

2004年10月19日(火)–2005年1月16日(日)

当館では、すぐれた表現者であるとともに、魅力的な教育者でもある、板橋廣美、川口淳、田嶋悦子の3名の作家にワークショップの講師を依頼しました。本展覧会では、教育者としての側面をワークショップの様子を紹介することで示しながら、3名の当館所蔵作品を展示し、個性的でどこか“気になるカタチ”を展観する構成としました。



1. サンドロ・ロレンツィーニ<ラルトーロ・ロ・ステツ>×A
2. ニーノ・カルーゾ<ヘルマ>×A
3. ユッタ・ジカ<ティーカップ>×B
4. アニエス・ニヴォー<ティーセット>×B
5. 田嶋悦子<コルヌコピア 01-VI>×D
6. 川口淳<記憶の断片>×D

収蔵品紹介

ルーシー・リー(Lucie Rie)
鉢(Bowl)
1975年 高さ11.0cm×径22.0cm

「ここに個人作家(studio potter)あり。」と、アーツ・カウンシル・ギャラリー(ロンドン)で開催されたルーシー・リーの個展(1967年)カタログ本文に、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館のジョージ・ウィングフィールド・ディグビーが書いている。このスタジオ・ポターとは、産業としてではなく、あくまで個人で行う芸術としての陶芸作家という意であり、イギリスではルーシー・リーに先立って、近代陶芸史の嚆矢とされるバーナード・リーチやウィリアム・ステート・マリーなどの陶芸家を称して用いられたものであった。

そして冒頭の言葉に続けて、ジョージ・ディグビーはルーシーの作品を、田舎風(rustic)ではなく、都会的(metropolitan)であるとした。すなわち「ルーシーの作品は民衆芸術のもつ郷愁的要素が全くなく、その様式はむしろ近代建築を意識しているものの様式である」と評したのである。ジョージ・ディグビーはルーシーの現代性(modernity)というものを好意的にとらえ、その作品に、当時圧倒的な存在感を示していたバーナード・リーチらの、いわゆる「伝統派」などと明瞭に異なる性格をもつ現代性を認めたのであろう。

ルーシーは、ナチの迫害を逃れ生地ウィーンからイギリスに渡った翌年の1939年にバーナード・リーチに深く敬意を払い、生涯にわたってリーチと親交を結んだが、出合った当初のごく僅かな時期を除いては、ルーシーの陶芸表現は決してリーチと交わることはなかった。陶芸の実践という点でもまた友情という点でも、より永続的で重要な存在はハンス・コパーである。ハンス・コパーもまたドイツからイギリスへの亡命者というルーシーと同様な境遇であった。1946年ハンスと出会った当初ルーシーは18才年下の彼に陶技を教えたが、程なく彼はルーシーが驚嘆するほどの土に対するすぐれた技量を示し、やがて少なからぬテーブル

ウェアの共作を試みるほどにルーシーの陶芸にとってきわめて重要な存在となった。さらにハンスの存在によって、ルーシーは「伝統派」と明確に一線を画し、その次世代の「モダニスト」と呼ばれる世代の中心的存在たりえたのである。1987年(初版)にルーシーの伝記を刊行したトニー・パークスによれば、彼との作業の中では、どんな新しいフォルムもどんな新しい釉薬もハンスの同意を得たということである。しかし1981年にハンスが死去して後は、色彩やデザインは自分自

身の判断を信じなければならなかった。またその結果ハンスと仕事していた年月では抑制されていた豊かな色彩がよみがえったともトニー・パークスは指摘する。彼はハンスの死後、ルーシーが病で倒れる1990年までの10年間を特にポスト・コパー時代と位置づけている。

1975年にハンスは治療法もなく苦痛を止める方法もないという運動ニューロン疾患と診断され闘病生活に入った。本作品はこの頃に制作されたものとされ、この時期の作例としては、ポスト・コパー時代の兆しなどと云わないまでも、きわめて色彩豊かなものであり、ルーシーが終生追い求めたフォルム、線、色彩の研究成果が惜しみなく発揮されたものといえる。きわめて薄く仕上げられ、華麗に広がる口縁と小さく絞られた高台による凛とした簡潔なフォルムが器形を支配する。二酸化マンガによる褐色のピトアレス・スリッブに炭酸銅を加えたブロンズ色の光沢を呈する何層かの色帯の間に、繊細な揺き落としの極細線が施されたピンクの色帯が配され、さらにトルコブルーの鮮やかなラインが全体を引き締める。同時期に近似した配色



はあるが、ルーシーは「二つとして同じものはつくりなかつた」(トニー・パークス)とされるように、これほど全て響き合う周到な構成感をもつ作例はまさに二つと無いと云えよう。高台内にRLの組合せと読めるハンス・コパーのデザインによるマークが施されている。

〈学芸部長 渡部誠一〉



岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel. 0572-28-3100 fax. 0572-28-3101
Email museum.1@cpm-gifu.jp
URL <http://www.cpm-gifu.jp/museum>

開館時間
午前10:00—午後6:00(入館は午後5:30まで)

